

苗場山麓 ジオパーク

Vol.
52

振興協議会だより

【発行日】令和3年12月23日
【発行】苗場山麓ジオパーク推進室
【お問い合わせ】025-765-1600



苗場山麓ジオパーク プレ再審査実施

苗場山麓ジオパークは、平成26年に認定され、4年後の平成30年に再審査を受け、再認定となりました。来年の令和4年度には4年間の活動のまとめ報告を行い、2回目の現地再認定審査を受けます。そのために、これまでの活動を整理し、ご指導いただくにあたり10月26日（火）～27日（水）の2日間においてプレ再審査を行いました。

審査員は、これまで苗場山麓ジオパークにご指導・ご協力いただき、審査経験者である東北学院大学の目代邦康先生にお越しいただきました。2日間の中で、これまでの活動における振り返りを踏まえた報告と自己評価表の確認を行いました。



鳥甲山の展望台（天池）

初日の現地案内では、ガイドの小島隆夫さんから見玉公園におけるユニバーサルデザインに基づく整備と活動報告を行いました。次に、新しく整備した鳥甲山展望台について、ガイドの中沢謙吾さんから説明があり、合わせて天池の様子も紹介しました。その後は、山の展望台およびトレッキングルートの整備について紹介しました。そして、栄村自然植物園、栄村歴史文化館「こらっせ」をご案内し、1日目を終了しました。

2日目は、ジオラフティングについては日本アウトドアサービスの岩館広彬さんから、中条川崩壊地形と震災復興祈念館「絆」では、栄村防災担当の久保田一樹さんからそれぞれ説明を行ってもらいました。その後、観光部局が進めているレンタサイクルと「山コーヒー」事業を川の展望台にて、担当の保坂光棋さんから説明してもらいました。昼食の場では、昨年度から開始の特産品認定制度「大地のたからもの」（苗場山麓ジオパーク認定商品）を担当の鈴木翔子さんから紹介してもらいました。

最後に、津南小学校へ伺い、3年生と4年生によるジオ学習の様子をご覧いただき、意見交換を行いました。

その結果、活動に関しては概ね評価していただきました。自然資源・文化資源保護憲章の策定や保全型のツーリズムの模索については、地域のアクティビティ活動と連携して全体計画の中で保全を柱として進んでいる姿が見えるとのことでした。さらに、これらの考え方をいかに伝えていくかが大切で、課題であるプロモーションについては、その1つの手法としてFacebookなどのSNSの活用をしていくべきとの助言をいただきました。苗場山麓ジオパークにおける素晴らしい教育活動を継続して行い、「保全」、「持続可能」などの「フィロソフィー（philosophy・哲学）」を地域で共有しながら進めていく必要があると指摘を受けました。

今年度中に、これまでの4年間の活動報告書の執筆を行い、来年度、日本ジオパーク委員会に提出して、秋頃に現地審査を迎える予定です。



外丸の調査現場にも行きました



大地のたからもの～苗場山麓ジオパーク特産商品ご紹介⑥～



【段丘天ぷら】株式会社 綿屋旅館 〒949-8201 新潟県津南町大割野 ☎025-765-2034
チェックイン15:30～／チェックアウト～10:00 ※宿泊した方に提供しています

ジオストーリー

雪に覆われる苗場山麓の山菜は、柔らかく苦味が少ないのが特徴。夏の高原野菜は朝晩の寒暖差によって甘みが抜群。キノコも豊富で大地の恵みの素材には事欠きません。旬の素材を採ってすぐ天ぷらに。河岸段丘をイメージした盛り付けです。

※苗場山麓ジオパーク振興協議会・商品開発部会事務局では、新規商品の申請について、随時ご相談を受け付けております。

お問い合わせ 津南町役場観光地域づくり課 電話025-765-5454



《再審査に向けてひた走る室長日誌2》 プレ再審査を終えて

令和4年の再審査が不安で思いついたのが「プレ再審査」であった。多忙の中、プレ再審査の審査員を買って出ていただいたのが目代邦康先生であった。

10月26日(火)、朝の8時45分に越後湯沢駅改札口で久しぶりの再会であった。聞けば、前日の夜中に大宮で一泊され、朝早々においでいただいた。ありがたいことである。

ジオパークの中核施設「なじょもん」を会場にプレ再審査が始まった。まずは「プログレスレポート」の資料を使い活動報告を行った。昼食は、笹葉峰大崩壊の先端部に位置するそば処「大平」さんで郷土料理と蕎麦で舌鼓を打ち、ジオパークにおける風土論や郷土料理の奥深さの話を伺った。そこでは「粉食」談義がはずみ、私の頭の中では宮沢賢治の『注文の多い料理店』の話と交差してジオパークの広がりや深さにしびれた。

一日目の現地審査は、雨の中、ユニバーサルデザインをテーマに石落しで行われた。整備したアスファルト舗装の散策道を車いすを押しながら、ガイドが車いすの目線に立ち、池への導水の歴史的意味を話し、熊避けの鐘を鳴らす。空気の中を走るキレイな音色にガイドは「近隣の廃校舎で実際に鳴らしていた鐘音」であることや、一度紛失したがまた静かに戻されたエピソードを話し、背の高い解説看板で足を止めた。なぜ解説板が高く作られているのか？それは3月の残雪期にスノーシューを履いてここを訪れ、その時期の残雪量から多雪環境を知るためであることや、岩壁にしみ出す水分が凍結膨張することで岩が剥離して岩が崩落し、ガラガラと音が鳴り響くことで「石落し」と呼ぶようになったことをお伝えした。さらに奥へ向かい、崩落礫を積み水平の水田面を構築した話をし、ふと見上げるとそこには大きなキハダの木。太い幹と空高く四方に広がる枝。たわわに実っていたキハダの実をかじってみると「わぁ！甘い。けど後に苦みがジワリ…」そこでキハダの効用を話しながら、車いすはさらに奥へ進む。ようやくたどり着いたサイトの解説板を読み、柱状節理のでき方をガイドが説明した。そこに用意した「点字解説板(手持ち)」と手で触れる「柱状節理の模型」を差し出し、視覚障害者への対応実技を体験していただいた。観察地点の遠望に見えるはずの岩壁は、うっすらと霧の彼方。その中でガイドは「溶岩の流れ方」や「溶岩と

魚沼層群との境界から水が湧き出すこと」などを丁寧に説明した。ユニバーサルデザインをテーマとしたガイド説明に手応えを感じた。

次いで鳥甲山展望台へ向かい、砂利道を歩き、鳥甲山を眺望した。ここでは石落しサイトの舗装道と砂利道のコントラストが明確化され、今後の対応が思考された。また、「天池は自然池なのか？湧き水なのか？」想定していた質問が出された。小雨降る秋山を巡り、道端の岩肌になにげなく掲示されている小さなサイト掲示に触れ、岩の裂け目から風がそよぐ「風穴」であることを告げ、関心を得た。

次に車は林床を抜け、「前倉トド(山の展望台)」へ。雲の中を指さし、「あそこに苗場山のテラスが…」と説明するも見えない。がしかし、「このようなウッドデッキを整備しているジオパークは少ないですよ。模範事例ですね。」と評価いただいた。その後、鳥甲牧場の地形面を観察し、中野の無班晶ガラス質安山岩の大露頭とその石材利用についてガイドが説明した。さらに北野天満宮近傍に整備された植物園で、ジオパークにおける移植による植物園整備の意図と広がりを見せる帰化植物問題を語り、行程の最後はジオパークサテライトである栄村歴史文化館「こらっせ」へ。出土考古資料や古文書を利用した災害展示やジオパーク展示を目の当たりにし感動した。一日目の審査を終え、宿で目代先生をガイドが囲み、なごやかな反省会の宴が流れた。



こらっせにて

二日目は、下層堆積物を侵食する千曲川—信濃川で進めている「ジオラフティング」の醍醐味と意味について、川原に下りて説明を聞いていただくと、興味津々の様子が伝わってきた。次いで「中条川上流の崩壊地形」のサイトに出向き、栄村防災担当者から長野県北部地震による崩壊とその後の対応について、ジオパークと防災を交えた観点から説明を聞いていただき、感銘を受けたご様子からサテライト震災復興祈念館「絆」に伺った。そこではふんだんに掲示されている災害写真を基に、山村における冬季災害の恐ろしさ、しかしながら山村ならではの結束の強いコミュニティの社会的意味やもとの越冬貯蔵の大切さなど、被災地ならではの生の声が響いた。防災学習拠点2地点を結ぶエリア整備の必要性が強調された。



ユニバーサルデザインを適用した石落し

次いで、信濃川右岸に位置する川の展望台に向かう。遠方に谷川東部連峰を背負う津南段丘が一望でき、その侵食を進めた中津川と信濃川の蛇行が見える展望台である。ここでは各々のジオ展望台を利用するアクティビティとしての企画「山コーヒー」を観光部局から説明を聞き、目代先生自らコーヒーを挽き、淹れ、飲むという五感を使う体験をしていただいた。その後、外丸扇状地の地質調査トレンチを実見し、その堆積層について調査員から説明を受けていただき、土石流堆積と平安時代の生活面の関係などを協議した。昼食は、商品開発部会による認定商品の説明を聞きながら「か久栄」さん考案のジオサラダや定食を食べながら談笑し、最後に津南小学校へ出向いた。4年生が3年生に伝えるクイズ形式のジオ学習を観覧した。継続化されたジオ学習による高校生から小学生へ向けた防災学習の展開等、持続的な活動の意味と深さを知ることができた。

ブレ再審査のとりまとめを「なじもん」で行った。目代先生からは「大きな問題はないが…」と発言があり、それを受けて、参加した各々がどのように解釈し、来年度の本審査に向かうべきかを考えたに違いない。



山コーヒーを体験する目代氏

目代先生から受け取る数々のキーワードから私は、これまでの「ジオ+エコ+カルチャー」の地域3要素をしっかりと受け止め、その保全と学習を第一義の活動として位置付けることを再確認した。さらに観光は副次的な意味をもつもので、従来の身の丈にあった活動を今まで以上に考え、ガイドさんと共に継続することがインタープリター化することであり、その成果が再審査の結果を生むと確信した。



突撃しよう!となりのジオ便り~とかち鹿追ジオパークからこんにちは~(とかち鹿追GP環境科学専門員 金森 晶作)

とかち鹿追ジオパークは、北海道の十勝平野北西部にある鹿追町全域を領域とするジオパークです。町の北部は大雪山国立公園内にあり、天空の湖とも称される然別湖をはじめとする自然遺産が多数存在します。南部には広大な平野が広がり、畑作・酪農を中心とした大規模農業が展開されています。

とかち鹿追ジオパークの特徴は、寒さと結び付いた地質、地形、生態系と人々の営みです。北海道の方言で凍てつく寒さのことを「しばれ」といいますが、しばれをテーマとしたジオパークはほとんど例がありません。特に興味深いのは然別湖周辺の風穴地帯に存在する永久凍土です。地球上の永久凍土分布域をみると、概ね年間の平均気温が-2℃以下の地域に存在しています。実は鹿追は標高の高い場所でもそこまでは寒くありません。それでも永久凍土となってしまう秘密は風穴地帯の地形にあります。

然別風穴地帯は、火山群の溶岩ドームが崩壊した岩塊斜面によって成り立っています。岩塊斜面は、隙間に冷気を溜め込みやすく、冬の冷気が保たれ、雪解け水を凍らせて地下水をつくり、場所によっては何年も保たれるのです。岩の隙間によって成立する天然の冷凍庫と言えるでしょうか。付近の山では地下から約4,000年前の植物片を閉じ込めた国内最古の水が見つかり、長く永久凍土が維持されています。然別風穴地帯では、真夏でも0℃に近い風が出てくる場所があります。それは地下水に冷やされた風なのです。

然別風穴地帯では美しいコケの森が見られます。周辺では凍土の分布とミズゴケ類の分布が概ね一致しますが、凍土がもたらす冷涼で湿潤な環境がコケを育み、コケのマットが断熱材となって凍土を守っているのかも知れません。この景観が見られる一帯は、日本蘚苔類学会による「日本の貴重なコケの森」に選定されています。

私たちは、しばれを楽しむことも忘れていません。然別湖は冬に完全結氷しますが、その湖上に雪と氷でイグルーを建設し、「しかりべつ湖コタン」という催しを開催しています。バー、露天風呂、イベントホール、宿泊ロッジ等が登場し、40年続く冬の風物詩となっています。ジオパークを紹介するイグルーもあります。コタンはアイヌ語で村・集落を意味します。雪と氷でつくられたコタンは、春になると湖へと還っていきます。



然別風穴地帯のコケの森



しかりべつ湖コタン

認定ジオガイド
が伝える

ここが好きだよジオパーク

認定ジオガイドがおすすめの場所、
もの、ことなどを紹介していきます。

三谷 友二さん



2016年6月25日 外丸矢放神社の八本杉～氷山登山 (ガイドNo.39 三谷 友二さん)

当時、涌井校長先生が、ジオパークガイド研修の時に『来週、氷山登山がありますよ』とおっしゃっていたので、外丸小学校*1年生といっしょに登りました。昔、若い時に痛めた右足首をひきずりながら必死について行だけの健脚ぞろいのジオガイド研修と異なり、小学生が登れるのなら、なんとかなるかな?…と思って軽い気持ちで参加したのですが、これが、実に思いのほか楽しかったのです。外丸矢放神社で集合、登山メンバーの中に大きな鍋やら、ガスコンロなど本格的な登山道具を背負った人もいて、先にさっさと登っていきました。それから、僕達はゆっくりと八本杉と神社の横を通り抜けて、裏にある山道(小学生でも足が届く高さの丸太の階段)を登り始めました。この丸太の階段は地元の方が作ったとのこと。でも、この登山道を作った方はきっとお子さんが外丸小学校に通っていたのだらうと思いました。だって、こんな子供の足でも届く高さの登山道をつくるのは手間がかかってしょうがないですもの。小学生への愛がこもった登山道です。

途中で休憩があり、登山道の階段に下を向いて一列に並んで休むと、そこには苗場山麓ジオパークで習った日本一長い信濃川が眼下に広がっているではないですか。健脚ジオガイド研修に『はあ～はあ～』言いながらついて行かなくても、こんな楽に信濃川が一望できたのです。標高が674メートルですから、少しくらい天気が悪くても、霧がでても、寒くてもダイジョウブ。

頂上(674m)に到着したら、そこには先発隊が担ぎ上げておいてくれた大きなお鍋に煮込み汁がもうできていました。お鍋の温かい料理を食べて、みんなで記念写真を撮ることになりました。少し広いところで、みんなそろってさあ集合写真…となったら、誰かが言いました。『頂上、持って来い!!』…???…“氷山”のクイをヒョイと抜いて、みんなの横に建てました。これで全員が頂上まで登った証拠になります。なぜか真新しいきれいな頂上の標識です。国土交通省の三角点と異なり、頂上の標識は移動自由のようです。それはそうでしょう。みんなで整備した登山道、みんなで運び建てた頂上標識…まさに小学生を含んでみんなで手作りしたジオパークでした。



みんなで記念写真 氷山のクイも一緒に写りました(分かるかな?)

*外丸小学校：平成27年（2015年）3月31日に140年という長い歴史に幕を閉じました。津南小学校に統合となりました。